

F. Steinkellner 教授の

新刊書並びに論文紹介

宮下晴輝

ウィーン大学のチベット学・佛教学研究所以より、新たに研究誌が企画され、このたびその第一冊が出版された。Verse-Index of Dharmakīrti's Works (Tibetan Version)。標題が示すように、この Verse-Index は Dharmakīrti (法称 A.D. 650) の作品における全詩頌のチベット訳による索引である。チベットの伝承では、佛教認識論及び論理学に関する Dharmakīrti の著作は「七量」(tshad ma bdun pa) と呼ばれるが、そのうちこのに取ら挙げられた作品とだけ Text は次のようにある。

- 1) Pramaṇavārttikam (PV)
Pramāṇavārttika-Karikā (Sanskrit and Tibetan).
Ed. Y. Miyasaka, Acta Indologica 2, 1971-72, 1-206;
3, 1973-75, 151-157 (Corrigenda).
PV は全四章から成っているが、Steinkellner 教授は、四章の順序に関して Text (ed. Miyasaka) の第一、第二、第三

章を、それぞれ第二、第三、第一章と改めて用いている。特にチベットの伝承にもとづき、理論上、実践上の理由からであるところとなっている。この問題に関しては、長崎法潤「ラナーナ・ブールティカ為自比量章の順位」(佛教学セミナー 第10号)に詳論されている。PV はすべて詩頌であり、その総詩頌数は、一四五四頌である。

- 2) Pramaṇavinīśayah (PVin)
a) Chapter I: T. Vetter, Dharmakīrti's Pramaṇavinīśayah. 1. Kapitel: Pratyakṣam. Wien 1966.
b) Chapter II: E. Steinkeller, Dharmakīrti's Pramaṇavinīśayah. 2. Kapitel: Svārthanūmanam. Wien 1973.
c) Chapter III: The edition of Peking (f. 285a7-329 b1)
詩頌と散文による全三章から成っている。PVin の詩頌の多くは、PV から取られている。第一章は五十九頌、第二章は七十五頌、第三章は八十七頌、総数二二一頌である。尚第三章の詩頌番号は Peking edition の対応は Appendix II に挙げられている。
3) Hetubinduh (HB)
E. Steinkellner, Dharmakīrti's Hetubinduh. Teil I. Wien 1967.

PV I (Svārthanūmanā) の第一頌を散文で解釈したものであり、引用詩頌は PV I-1 の詩頌のみである。

4) Vadanayāyah (VN)

The edition of Peking (Mdo 'gral, Ce, f. 364D8-400a 7).

すべて散文で書かれ、その中に三詩頌が含まれているのをよく見ることが出来る。

5) Sambandhaparikṣā (SP)

E. Frauwallner, Dharmakīrti's Sambandhaparikṣā. Text und Übersetzung. WZKM 41, 1934, 261-300.

二十五の詩頌より成っている。

6) Santāntarasiddhiḥ (SSI)

Th. I. Scherbatskoi, Tibetskii perevod sochinieni Santāntarasiddhi Dharmakīrti i Santāntarasiddhiḥkā Vinīṭadeva. Petrograd 1916.

議論全体を包括する一つの詩頌と九十四の sutra より成っている。

(以上に挙げた作品の内容・研究の概観は宮坂宥勝「ダルムキールティの生涯と作品」(H)密教文化93号を参照していただきたい。七部の作品のうち、Nyāyabindu“は、すべて sutra 体であり、詩頌は含まれていないため、この索引の対象からは除かれている。)

佛教の認識論・論理学に関する学派は、Dignāga を Dharmakīrti によって創設されたのであるが、それを継承しているネットの伝統を研究する場合に大きな handicap がある。と

いうのは、ネットの学僧はほとんどどのばあい、ネット訳された Dharmakīrti の作品を全く暗誦しており、従ってこういったネットの文献には非常に多くの引用句があり、なかでも Pramāṇavārttika を Pramāṇaviśiṣṭaya から多く引用されている。その自体は、Dharmakīrti の思想を正しく想起するためには適切なことであるに違いないが、我々がこういったネット文献を研究する場合には、この多量の引用句の出典とその文脈を容易に見出し得ることが前提条件となる。この「索引」は、こういった研究上の道具を提供することによって、ネット佛教における *ishād ma-tradition* の研究が助長されることを願って作成されたものである。と著者は序文に述べている。

著者 Steinkellner 教授は、ウィーン大学のネット学・佛教学科の教授であり、これまでの研究には以下のようなものがある。

研究書

„Dharmakīrti's Hetubinduh“, Teil I Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text; Teil II Übersetzung und Anmerkungen, Wien 1967.

„Dharmakīrti's Pramāṇaviśiṣṭayah“, Zweites Kapitel: Svārthānumānam, Teil I Tibetischer Text und Sanskrittexte, Wien 1973.

研究論文 (Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und

づらっている。即ち事物が目的を満たし得るかいかは、それが対応する Svabhāva をもっているかいかにかかっている。そしていかなる Svabhāva をもまない事物は、何ら目的を満たし得ず、従って実在性のないものである (pp. 182, 14-183, 5)。

このようにして著者は、事物の Svabhāva とは結果を生ずる (karyotpādana-) 能力 (śakti) である、と多くの引用例をもつて規定する。そして Svabhāva は janaka, karin-, utpādana- 等の限定語とともに用いられ、しかも直接、原因 (upādānam) であることも表示されることを著者は示す (pp. 183, 13-184, 6)。

この Dharmakīrti にとっては、結果を生ずる原因とは、単一に存在するのではなく、原因の複合体 (netusāmagri) なのであるから、結果を生ずる Svabhāva は、原因の複合体の Svabhāva である。即ち結果を生ずる有能性として規定された複合体の属性が、Svabhāva である (pp. 184, 7-186, 11)。

「これらの共通の原因のなかの」何か一つの能生者が、このような「能生者として」Svabhāva をもつのではない、能生者である「原因の」複合体がこのような Svabhāva をもつのである。このような「複合体」のみが「論理根拠としての結果を通して」推論されるのである。そしてこの複合体のみが、結果において Svabhāva が存続していることの根拠なのである (pp. 185, 4-10; PVSV p. 23, 19-21)。

「論理根拠としての」完全な原因を通して推論される結果の生起を、我々は「このような原因の」Svabhāva と呼ぶのである。というのは「結果の生起は」これ以外のいかなる事象にも依存しないからである」(C. 7)。またこの「結果の生起」というものは、対応して接続している「原因の複合体」以外のものに依存しないのであるから、この「複合体」にのみ結びつけられた、事物(即ち、複合体)の Svabhāva なのである。このはあく(即ち、原因が完全に原因の複合体として集合しているばあい)、完全な原因から、結果の生起の可能性のみが推論されるのである。なぜなら、完全な「複合体として集った原因」によって、結果を生ずる有能性が推論されるからである。そしてその「結果を生ずる」有能性は、その複合体にのみ結びつけられ「それ以外のいかなる原因にも依存しないのである」。それ「有能性」が、従って、「この複合体の」Svabhāva として推論されるのである (pp. 185, 13-186, 4; PVSV 6, 24-7, 1)。

このように規定された Svabhāva と Dharmakīrti の概念論においてどのような意味をもつのであるかを、著者は次に示している。

表象 (vikalpā) の対象というものは、特殊な事物なのではなく、実在しない一般である。そしてそれは、多くの特殊な事物を他の事物から共に区別することとして理解される。つまり、Dharmakīrti の場合、ある事物に対して表象をもち得るのは、

「分離」(apohah)という手続きを経て可能なのである。ところがこのような多くの事物にわたっての共通した差異性というものは、多くの事物が同等の判定を生じさせることができるという点に基いている。Dharmakīrtiが、「複合体の Svabhāva」ということを言うのは、多くの原因が同じ結果を生ずるところを事実を表わさんかためである(pp. 186, 27-188, 2; p. 190, 1-7)。従ってここに言う「分離」も、事物の Svabhāva というものに基いているのみ可能なのである。Dharmakīrti は次のように言う。

表象的認識 (dhi...vikalpika) は、「事物の」 Svabhāva を把握することを通して、そのような結果をもたない事物を区別するに基いている生ずる (p. 191 Anm. 47; PV v. 76)。

このように表象の対象とらうものが、従ってまた言葉の意味 (Bedeutung) が、Svabhāva なのである。しかしそれは、実在的な特殊性において生じているのではなく、事物の効能性が表象を通して規定された帰結として理解される、非実在的な同性 (Gleichheit) に生じているのである。このような事物の Svabhāva は、同性性という観点のもとで、それらに共通する他のものからの差異を判定するという手順に基づいて、表象され、言葉をもって表現されるものなのであり、従って Dharmakīrti の体系におけるかかる意味での Svabhāva は、我々が、Begriff¹⁾ として理解し得るもののものなのであると著者は認む (p. 193, 3-11)。

さてこのように「概念」として理解される Svabhāva というものは、Dharmakīrti の論理学においても重要な役割を担っているといえよう。そのことを著者は次のように示している。推論が正しい認識 (pramāṇam) であり得るためには、原則として次の二つのことが前提されていなければならない。第一に、知られてゐる概念、即ち論理根拠が正しく規定されていること。第二に、知られてゐる概念、即ち根拠 (hetu) と、未決定の概念、即ち帰結 (sādhyam) という二つの概念の間に論理的連関、即ち「包括」, "Umfassung" (vyāpti) が存在する。

(pp. 201, 14-202, 16)。Dharmakīrti は、このような二概念間の論理的連関に対する条件として、Svabhāva によるそれらの結合 (svabhāvapratibandha) とらうものを考える。

Svabhāva による結合が存在するはあり、ある事象 (根拠) は、「他の」事象 (帰結) を離れることはなく (na vyahicari) (p. 202 Anm. 87; PVS v. p. 2, 19-20)。

この Svabhāva による結合とらうものは、二つの概念が同じ実在性を規定している場合のみ与えられるのであり、従って一方の概念が規定しているところのものは、他方の概念が規定しているところのものと同一 (identisch) なのである。二概念間の論理的連関は、従って、それらの実在的な同一性 (reale Identität) に基いて生じてゐる。

ここで Dharmakīrti は、このような実在的な同一性とらう意味での Svabhāvapratibandha とらう、また結果という概念と、原因という概念との関係を意味する場合の

Svabhāvavapratibandha が存在する(p. 203, 1-8)。Dharmakīrti 自身は次のように言っている。著者にならってそのまま引用しよう。

従ってそれ「根拠」とのみ結びついでる Svabhāva (即ち帰結) は、まさしくその性質 (bhāvah) を非存在にする (v. 23 a-c)。

例えば「存在しない」木が、Simśapa を「非存在にする」ように。小枝などをもっている特定の「事物が」そのように(即ち、Simśapa と同じ名で)知られているのだから、この「木」はこの「特定の事物の」Svabhāva なのである。そしてまさしく Svabhāva が事物なのであるから、従ってそれ自身自身の Svabhāva なしに事物が存立し得ようか。だからそれ「根拠」、Simśapa」は Svabhāva による結合の故に、「帰結」「木」を離れない。

あるいは、原因は結果を「非存在にする」。なぜなら「結果は原因を」離れることがないからである(v. 23 c-d)。存在しない原因は結果を非存在にする。さもなくば、それはその結果ではあり得ない。しかしながら、原因と結果の確定した関係というものは、「その原因に対する結果の」Svabhāva を確定する。従って両者の場合とも、「帰結が存在しないとき、根拠の」存在しないことが、Svabhāva による結合を通して与えられているのである。

そうではないとき(結合が存在しないとき)、一方の非存在によって、他方の非存在がどうしてあり得るであろうか。

馬をもっていないからといって、どうしてその人が牛をもっていないといえるか。また同様に、どうして一方が存在するからといって他方が存在するであろうか。牛をもっていないからといって、その人が馬をもっているとどうしていえるか(vv. 24-25)。

従って根拠 (hetu) は帰結 (sādhya) を Svabhāva による結合に基づいてのみ、認識せしめるのである。そしてこの「結合」は、「その存在」(tadbhāvah) としてか、あるいは「それからの生起」(tadutpattin) として規定されるのである (p. 203, 9-35; PVSV pp. 16, 26-17, 13)。

この Svabhāvavapratibandha の二つの形式から、二種の論理根拠が導き出される。それは、概念 (svabhāva) と結果 (kārya) である。この二種の論理根拠に基づいた二種の推論式の間には本質的な差異というものはない。この両者とも、以前には偽であるかあるいはいまだ知られていない概念を、知られている概念に基づいて正しく認識することなのであり、そしてともに、根拠づける概念と帰結される概念との実在的な関係に基づいているのである。二種の区別は、ただこのような関係が、二種の仕方でも可能であるという見解から出てくるものにはすぎないのである (p. 207, 7-14)。

著者は最後に論文を要約して次のように言う。Svabhāva は実質的に二つの意味をもっている。存在論的には、存在の原理としての事物の能力を意味し、論理的には、実在物に関係づけられた抽象的な構成物 (vikalpa) である概念を意味する。

そしてこの二つの意味の体系的な関係は、Apolavāda の領域のなかで理解され得るのである」と。

二種の論理根拠、Svabhāvahetu と Kāryahetu とを用いた推論式は、それぞれ一方は同一判断に、他方は因果判断に基づくものでもあるとも考えられよう。そして従来の解釈では、特に Stecherbatsky によって、二種の推論は、それぞれ analytic と synthetic なる区別をなされた。著者は “On the Interpretation of the Svabhāvahetu” (WZKS Bd. XVIII, 1974) なる論文においてかかる従来の解釈を批判している。主な論点は次のようである。

Kant によって analytic な判断とは、述語概念が主語概念に含まれているものを意味する。しかし Dharmakīrti の場合は、概念は Apoha 理論によって、他の諸可能性の排除以外の何ものも含んではいないのである。

また analytic な判断は、同一性の原理に基づいて、すべて a priori に確立されているものである。ところが他方、Dharmakīrti の場合、推論関係(vyāptih)の必然性は、全く経験的に確認される。それは Svabhāvavapratibandha によって保証されるが、その意味するところは、実在的な同一性に他ならない。即ち推論関係の基盤は、概念の領域にはなく、実在する事物の領域に求められている。そして直接には知覚に依存しているのである」と。

Dharmakīrti の作品の Verse-Index が出版されたのを機会に、著者 Steinkellner 教授の研究の一端を紹介した。

(Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 1, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, 1977. 21.5×27.5cm pp. XIV+225, AS. 200.0.)

賛助会員募集

次の要項で賛助(定期購読)会員を募集いたします。会員には本誌を発行後すみやかに送ります。

○会費 年間千五百円(二冊分)
○申込み 東京都北区小山上総町

大谷大学佛教学研究室
佛教学セミナー編集部

* 郵便振替用紙も御利用下さい。
(京都 25303 大谷大学佛教学研究室)